

金の茶釜

野村胡堂

—

「親分、金の茶釜きん ちやがまを拝まんだことがありますかい」

ガラツ八の八五郎は、変なことを持込んで来ました。

「知らないよ、金の茶釜きん ちやがまや錦にしきの小袖こそではフンダンにあるから、拝むものとは思わなかつたよ」

銭形平次は無関心な態度で、よく澄すんだ秋空を眺めておりました。見立て三十六歌仙かせんの在ざい五中将ごちゆうじやうが借金かきんの言い訳いわけを考かんがえていると言いった姿態ポーズです。

「へエ——、あの品川しんがわの流行はやりものを、親分は知らないんで」

「金の茶釜がどうしたんだ？」



「品川の漁師町の藤六が、——親孝行で御褒美まで頂いた評判の男ですがネ、

その藤六が、品川沖で網を打つと、金の茶釜が引つ掛つたんだそうで。さつそく金主が附いて、八つ山下へ親孝行の見世物が出る騒ぎでさ」

「そいつは変っているな、いつの事だい」

「釜を見付けたのは十日ばかり前、小屋をかけたのは昨日きのうで」

「恐ろしく気が早いじゃないか」

「そんなのを見ておかなきゃ話の種にならないから、きのう昼過ぎから品川まで行って来ましたよ」

「達者な野郎だ」

「その代り、親孝行の金の茶釜の走りを見て来ましたぜ」

「かほちや南瓜じゃあるまいし、金の茶釜に走りてえやつがあるかい」

が、こんな無駄を言っても、平次に取っては、ガラッ八の骨惜しみをしない

のが有難かつたのです。

「変なものですぞ、親分、——ちよいと行って見ちゃどうです」

「御免を蒙こうむろうよ。そいつは唐土もろこしの二十四孝の真似事さ、香具師やの細工物に決っているじゃないか、郭巨かくきよの釜掘りてのはお前も聞いたことがあるだろう。そのうちに、『両頭りょうとうの蛇』が出て来るよ」

「へエツ、そんなもんですかねえ。擬まがい物と解とっているなら、踏込んで挙げちまおうじゃありませんか、諸人を惑まどわして、銭を取るのは太ふてえ野郎だ——」

「擬い物でも何でも、親孝行の見世物へ踏込んで悪ほい。抛ほっておくがいい」
「そうですかねえ」

「親孝行は真似でもしろって言うじゃないか。八なんかも、金の茶釜を見ての戻り、叔母さんへ煎餅せんべいの一と袋も買って来る気になつたらう」

「まアそう言ったようなもので」

「だから抛ほうっておくがいい」

平次は相手にもしません。

しかしこの話があつて三日目、ガラツ八はまた新しい情報を持込んで来たの
でした。

「親分、おかしな事になりましたよ」

「何がおかしいんだ、そんなところに突つ立って居ちや邪魔だよ」

平次は縁側の柱に凭もたれたまま、天文を案ずる形になっていたので。

「呆あきれるぜ、親分。銭形の平次親分ともあろうものが、雲を眺めて、この結構
な秋の日を暮らすなんて——」

「抛ほうっておいてくれ、岡っ引が雲を眺めていられるのは御時世のお蔭さ。とこ
ろで、どこに一体おかしな事があつたんだ」

「品川ですよ、親分」

「金の茶釜の見世物だろう」

「その通りで」

「金の茶釜の正体が張子はりこに金箔きんぱくを置いたのとても判ったのかい」

「そんなつまらねえ話じゃありません」

「金の茶釜を盗むあわて者があつたんだらう、家へ持って帰って拭き込ふむと銅あかになる奴さ。銅壺どうこの代りにもなるめえ」

「親分、そんな馬鹿なことじゃありませんよ。見世物小屋に入って、金の茶釜を盗んだ上、番人夫婦を斬った奴があるんで——」

「なるほど、そいつは厄介だ」

銭形平次は少しばかり本気になります。

「ちよいと行って見て下さい、親分」

「俺は御免を蒙こうむるよ」

「でも、茶釜は金無垢きんむくで、千両箱でも出さなきやア買えない程しろものの代物ですぜ。

江戸中の道具屋がわざわざ見に行つて胆きんもをつぶしたんだから嘘じゃねえ」

「道具屋の胆の潰れたのなんか、疝かんの薬にもならねえよ」

平次は容易みこしに神輿みこしをあげそうもありません。

「親分、そう言わずに、拝むから行つて下さい」

「拝まれたくはないよ」

「それじゃ、川崎の大師様へお詣りに行きますよう、お供しますぜ」

「いやな野郎だな、誰に頼まれて来たんだ」

「へエ——」

「品川は少し遠過ぎるが、事と次第によつちや行つて見ないものでもない、いつたい誰に頼まれて来やがったんだ」

「へエ——」

「へエ——じゃないよ、その見世物の金主は誰だい」

「品川の増屋佐五兵衛ですよ」

「名題の熊鷹くまたかだ、——まさか佐五兵衛に頼まれたんじやあるまいな」

品川の高利貸増屋の佐五兵衛から金でも貰って、親分の出馬を引受けて来たのではあるまいか——平次はフトそんな事が気になったのです。

「飛んでもない、親分。あっしは金貸と田螺合たにしあえは大嫌いなんで」

「変な取合せだな、——それじゃ誰に頼まれたんだ」

「言いますよ、親分、こうなりや皆んな言ってしまうですよ、——金の茶釜は品川の海で、孝行者の藤六の網にかかった——」

「それは何べんも聞いたよ」

「その藤六が、毎日見世物小屋へ来て、看板かんばんになっているんだが——何にも物を言わねえ、尤も漁師もつとりょうしの藤六に器用な口上は言えっこはないが、——金の茶釜

を飾った舞台へ出て、袴かみしもを着て、彼方あっちへ行ったり、此方こっちへ来たり、籠の中の軍鶏しゃも見たいに歩いてばかりいる」

「嫌なことだな、親孝行なんか売物にして」

平次は苦い顔をしました。

「本人が好きでやって居るわけじゃねえ、それにも訳があるそうですよ」

「それが何うした」

「金の茶釜が盗まれて、佐五兵衛に小言を言われて弱っているのを見兼ねて、妹のお春があつしへ頼むんです。何とか銭形の親分さんさんにお願いして金の茶釜を見付けて下さい。兄が佐五兵衛に責めせさいなまれるのを見ちゃ居られません——と涙を流して」

「よし解った、八五郎の口添くちぞえで、若い娘の頼みとあっちゃ、こいつは行かなきゃなるまい」

平次は氣持よく立上がりました。

「親分、有難い」

フェミニニストの八五郎は妙にソワソワしております。

二

ガラッ八に案内されて、見世物小屋に行った錢形平次は、騒ぎのあまりの大おお袈裟げさなのに驚かされました。

小屋は八つ山の崖の上、花時を除のけると、ひどく閑静な場所ですが、それでも街道から見通しで、高輪からも品川からも足場の良いところ、——そこに方むしろは五間ほどの筵張り、青竹を廻した木戸を入ると、中はすっかり土間で、正面の小さい舞台に畳を三枚ほど敷き、一そでう双の金屏風きんびょうぶをめぐらして、真ん中ほどのと

ころに、三尺ばかりの台を据えまして、この上に金の茶釜が飾ってあったのでしよう。

台の上に掛けたのは、凄まじくも物々しい蜀紅しよくこうの錦にしぎ——尤も、これは大贗物おおまがいのものです。舞台の裏には嚴重な二重箱が、蓋を開けたままになっておりますが、金の茶釜は夜分だけこの中に納められるのです。

「泥棒はこの箱をコジ開けて取って行きました」

そう言いながら、卑屈ひくつそうな顔を出したのは、金主佐五兵衛の手代、この小屋をいっさい仕切っている米吉よねきちという五十男です。

「番頭さん、銭形の親分だよ」

ガラツ八は後ろから黙々として来る平次を眼で迎えました。

「これは、お見それ申しました、御苦勞様でございます。私は増屋の奉公人で、米吉と申します、へエ——」

これだけ言ううちには米吉は六遍べんもお辞儀じぎをしました。こんなのは、さぞ金を借りた者には、冷酷無慙れいこくむざんなことをするだろう、——と言ったような事を平次は考えていました。

小屋の裏の方、金の茶釜の箱を見張るような部屋には、番人助七、お大の夫婦者が、枕を並べてウンウン唸うなっております。

「夜はこの小屋に茶釜を置いてあつたんだね」

平次はそれが不思議でたまらなかつたのです。千両もするという金の茶釜を、こんな筵張むしろばりの小屋の中に置いていいものでしょうか。

「へエ——、番人夫婦が引受けて、万に一つも間違いがないことになって居りました」

と米吉。

「ところが現に間違いがあつたじゃないか」

「実は、毎晩木戸を閉めると、金の茶釜は裏から増屋まで運んで行き、朝になるとまた増屋から持って来ることになって居りますが、それは世間体だけで、——実はこの小屋に泊め置くことになって居ります」

「それは誰の役目だ」

「茶釜を運ぶのは、私の役目ということになって居りますが——」

平次も少し呆れました。金の茶釜の真物をむしろばり筵張の小屋に番人夫婦と泊めおいて、得体の知れない包をもつとも尤らしく増屋へ運ぶというのは、あまりに人をな舐めた話です。

「そのからくりを知っているのは、誰と誰だい」

「主人と私と、増屋の若旦那の佐太郎様と、木戸番の半助と、番人の助七夫婦と、孝行藤六くらいのものでございます」

「釜はほんもの真物の金だろうな」

平次はもう一つ駄目を押ししました。

「それはもう親分さん。品川の沖で、藤六の網に入った時は、潮錆しおさびで少し汚れておりましたが、近頃はよく拭き込んで、目のさめるような山吹色でございました。そんなに大きくはございませんが、蘆屋形あしやがたと申すそうで、立派な品でございます」

「目方は？」

「八百——いえ、一貫八百目でございました」

そんな事を訊きながら、平次は番人の部屋へ入って行きました。

「どうだい、傷は、——飛んだ災難だったね」

敷居際にしゃが踞んだ平次を、助七夫婦は床の中からマジマジと見上げます。

「有難うございます、親分さん」

「何処をやられたんだ」

「私は肩先でございます。女房は足を挫くじいただけで、これは斬られたのじゃございませぬ」

五十男の無精髻ぶしょうひげだらけな助七は、臆病おくびょうらしくこう言うのです。

「どんな様子だったんだ、詳しく話くわしてくれないか」

「へエ——、一昨日は大層よく入って、木戸のあがりを入れた錢箱を二度まで増屋へ運んだ位でございます。それですっかり気が緩ゆるんで、祝心に一合つけて寝たのが間違まちがいのもとでございました。暁方あけがた近ちかくなってから——丑刻やつ半頃はんかげでございませうか、舞台の方に変な物音がするのを女房が聞付け、そつと私を起しましたので、夢中になって飛起きて行って見ると、覆面をした浪人者が、金の茶釜を箱の中から取出して、逃出そうとして居るじゃございませぬか。驚いて大声を出しましたが、この辺は家もなく、暁方と言っても人通りもない時分ときぶんで、誰も来てはくれませぬ。それでも金の茶釜を盗られては大変と、女房と二

人で一生懸命獅噛み付きますと、浪人者が抜き討に私の肩先へ斬付け、女房を投げ飛ばして外へ飛出してしまいました」

「――」
平次はうなずきました。助七は半身を床から拔出して、なかなか雄弁に説明してくれませぬ。

「後を追っかけようとしましたが、何分の深傷で、どうすることも出来ませぬ。女房は足を挫いて、これも身動きも出来ない始末。ようやく朝になって御近所の方が来てくれましたので、増屋へ知らせ、御主人と番頭さんに来て頂いたようなわけでございます。あの茶釜がなくなつては、私は首でも吊らなきやありません。親分さん、お願いでございます。泥棒を見付けて、茶釜を取返して下さい」

助七はそう言って、床の中から平次を拝むのでした。

「金を盗られたのと違って、道具は思いのほか早く出て来るものだよ。あんまり心配しない方がいい」

「有難うございます」

女房のお大だいはその問答を聞いて、半身を起したまま手を合せて居りました。

「ところでもう一つ訊くが、その時小屋の中には灯あかりがあつたのかいと平次。

「いえ、灯なんかありません。番頭さんが油が惜おしいと言いますんで、へエ」
番人の助七はブルブルと頭を振ります。少しは米吉への面当つらあてでしょう。

三

「親分、土地の御用聞の菊松きくまつが、今朝一人挙あげて行ったそうですよ」

ガラツ八は何処からかそんな事を聞出して来ました。

「それはいい塩梅だ、——誰だい、それは？」

「権八の浪太郎という、浪人崩れのならず者で、一寸いい男で」

「それが何うしたんだ」

「何処の小屋へも、長いので脅かして、只で入る野郎です。それが孝行藤六の妹のお春に心をかけ、執念深く言い寄って弾かれたので、藤六にケチを付けるためにやった悪戯かもしれないと言うことですよ」

「そんな事もあるだろうな。——が、一貫八百目の釜を裸のまま抱え、番人を斬って、女房を投飛ばす芸当はむずかしいぜ」

平次は他の事を考えている様子です。

そこから品川の増屋までは五六町、平次は米吉に案内させて暖簾をくぐりま
した。

「これは銭形の親分さん、飛んだ迷惑でございます」

煙草盆を下げて出たのは、四十七八のよく肥った愛嬌あいぎょうのいい主人でした。

「金の茶釜がなくなったそうで」

「へエ、それで実は困って居ります。あの通り小屋まで掛けて、資本もとを入れた仕事ですから、今茶釜がなくなつた——では、まるまる損そんでございます。何とか親分さんのお力で、悪者を取押えて頂きたいものでございます」

佐五兵衛は如才ない調子ですが、結局自分の利益以外のことには、興味も注意も持たない言い分でした。

「金の茶釜の値打はどれ位のものかな」

平次はそんな事を訊くのです。

「左様、道具屋仲間は千両と申しております」

「それを海から見付けたとすると、網を打った藤六の物だろうな」

「いえ、あの、私が譲り受けました。ハイ、この増屋佐五兵衛のものでございます」

「平次はそれ以上追及しませんでした。質素なくせに、何処かひどく金目のかかった暮しをしている佐五兵衛の家の中を、珍らしそうに眺めまわしている様子などは、ガラツ八の眼から見ると、日頃の平次のたしなみにはないことです。」

「每晚あの小屋の中に茶釜を泊めておくことは、他に知ってる者はあるまいな」

「私と米吉と伴佐太郎の外にはございません」

「その佐太郎さんというのを呼んで貰おうか」

「へエ」

つれて来たのを見ると、まだ十二三の少し發育の悪い少年。これでは金の茶釜より、かるやき軽焼のせんべい煎餅の方に興味がありそうです。

「八、久し振りで潮風に吹かれて見ようか」

「へエ」

平次は増屋を出ると、心覚えの漁師町りょうしの方へ辿たどりました。

「面白くない家だね、親分」

「金が溜り過ぎて、家の中が冷たくなって居るんだよ」

「へッ、こちとらも少し冷たくなって見てえ」

「馬鹿だな」

漁師町の孝行藤六の家はすぐ解りました。

形ばかりの九尺二間で、雨戸の代りに筵むしろを下げてある有様で、その前に立つただけで、平次は胸を打たれるような心持です。

「御免よ」

「ハイ」

筵をかかげて顔を出したのは、——平次は思わず息を呑みました、十八九の素晴らしい娘、身扮みなりの汚なさも、髪かみの乱れも、江戸の真ん中では想像も出来ないひどさですが、陽に焦けた浅黒い顔の品のよさと、娘らしい健康な愛くるしさは、これも江戸の中などでは、金かねの草鞋わらしで探しても見付かるような代物しろものではありません。

「銭形の親分をつれて来たぜ、お春」

八五郎は後ろを振り返って、自分の偶像ぐうぞうを拝ませるような勿体らしい顔をしました。

「まア」

お春は真っ赤になりました。どんな珍客があったところで、羽織一枚、前掛一つ換えることの出来ない暮しだったので。

「兄貴は？」

ガラッ八は訊ねました。

「まだ戻りません」

「少し訊きたいことがあるんだが」

平次はこの娘だけに訊きたいことがあったのでしよう。

「母が寝て居りますから」

お春は眼顔で半分嘆願しながら、自分の家の門口を離れて、砂浜の方へ二人を誘さそいます。チラリと筵の間から見た中の様子の貧しさ、平次はさすがに強しいてとも言い兼ねました。中には六十を越して、中風で身動きもならぬ母親のお辰たつが、眠るとも覚むるともなく寝て居るのでしよう。

「お春さんと言ったね、——あの金の茶釜は、本当に品川沖で兄さんの網に掛つたのかい」

「これが一番大事なことなんだ、正直に言ってくれないか」

「兄からは何にも聞きません。——でも、兄はあんな小屋へ、毎日行って、顔をさらすのが辛い様子でした」

「茶釜がなくなってから、兄さんはどうして居る？」

「黙って考えてばかりおります、——いつもおっ母かさんの相手をして、賑やかな人なんですが」

「それでお前は、心配になって、この八五郎に頼んだんだね」

「え」

非常に深い仔細しさいがありそうですが、十八の娘には、それ以上の事は何んにも解らなかつたのです。

「あれ、兄さんが帰って来ました」

娘は手を挙げて、波打際なみうちぎわの向うの方を指しました。

沖の方から小舟を漕いで来た若い漁師が二人、砂の上に舟を引揚げると、その一人は、妹の姿を見付けて、此方へ歩いて来るのです。

「精が出るね、藤六」

八五郎は声を掛けながら、手でも握るように側へ寄りました。

「へエ、小屋こやが休むと、遊んでも居られません」

親孝行の看板にならない日は、たった一日の暇ひまでも、漁りように出なければならぬほど切詰めた暮しをしているのでしよう。

「銭形の親分が、お前に訊きたいことがあるんだとよ」

「へエ」

藤六は困り抜いた様子で立ち竦すくみました。小屋へ引出されたせいとか、髯はよく当って居りますが、三十前後の逞たくましい顔は、赤銅色しゃくどういろに焦やけて、正直そうなうちにも、純情家らしい眼が人をひきつけます。

「金の茶釜は本当にお前の網に掛ったのかい」

「――」

「本当の事を言ってくれ、藤六」

平次の調子はひどく打解けて居りました。

「親分さん、そいつは訊かないで下さい。私は困ることがありますから」

藤六は泣き出しそうな顔になります。

「それじゃ、これ一つだけ聞かしてくれ。お前は見世物小屋へ好きで出て居た

のかい、それとも、親孝行したさのお前が日当にっとうが欲ほしさに出て居たのかい」

「――」

藤六は唇を噛みました。深い深い苦悩が、その頬をヒクヒクと痙攣けいれんさせます。

「それは誰にも迷惑をかける話じゃない、お前の心持だけの事だ、――聞かしてくれ」

平次の調子には、何か沁しみ込むむような思いやりがあります。

「どつちでもありませんよ、親分さん」

「と言うと」

「私は、たった一人の母親さえ満足に養えない、意気地のない男です。世間で評判するような孝行者なんかじゃありません」

「でも、お上から御褒美ほうびを頂ういたことがあるそうじゃないか」

「おとし一昨年の夏、親孝行の廉かどで町奉行所から青緞あおざし何貫文かの褒美を貰もらったことは、かなり有名な話です。」

「もったいない事だが、あれはお上のお鑑定めがね違いですよ、——親孝行なんて飛んでもない事だ。たった一人の母親をせめて戸も障子もある家へ入れて、甘い物でも食わせて、暖かい物でも着せて上げたら親孝行にもなるだろうが」

藤六は遥かの方、筵むしろで閉ふさいだ鳥の巢のように憐れな自分の家を眺めて、ポロポロと砂浜に大きな涙をこぼすのです。

「それが、——金づくで動きの取れないようにされたとは言いながら、親孝行の見世物にまでされて、——私はなぶり殺しにされるような念おもいでしたよ、親分。——生れて始めての袴かみしもなんか着せられて、猿芝居のお猿のように、百人千人の見物の前に、親孝行はこうで御座いと、この顔をさらすつらさを考えて下さい」

「——」

「あんなイヤな思いをする位なら、針の筵むしろへ坐った方が余つ程楽だろうと思ひましたよ、——私は親に三度の物もろくに上げることの出来ないような、日本一の不孝者だ、——親不孝さらの晒し物になるんだと、自分で自分の心に言い聞かせて、日の暮れるのばかりを待っていました」

とつとつ
訥々とした言葉に涙が交じって、自分の腸を叩きつけるように言う藤六の前に、お春も、八五郎も、平次も泣いておりました。

「それ程嫌なら、何だつて断らなかつたんだ」

平次はようやく本題を切り出しました。

「断ると、この妹を、あの増屋の旦那に取上げられます」

「そんな馬鹿な事はあるまい、お上というものもある、世間というものもある」

「三十両の金は、細い漁師りょうしの暮しでは返す見込みも立ちませんよ、親分」

「すると」

「三年前父親が亡くなった時、思案に余つて増屋から借りた五両の金へ、利息に利息が積つて、三十両になりました」

「――」

「妹のお春を奉公によこすか、金の茶釜といっしよに見世物に顔を貸すか、二

つに一つの強談です」

藤六の顔は夕陽にカツと燃えました。

「そんなら兄さん、私が奉公に行つて——」

始めて事情を知つたお春は、たまり兼ねて口を出しました。夕陽の砂浜に立つて、その檻褸つづれからも後光ごこうが射しそんで、増屋の佐五兵衛が爪を磨ぐとのも無理のない美しさです。

「飛んでもない、お前をやつてなるものか。増屋の旦那は、名題の狒々ひひおやじ親爺だ、俺が見世物になる位の事は、何の、——親不孝しんぶこうの業ごうさらしだと思えばあきらめがつく」

「だって、兄さん」

兄妹二人の美しい争いを、平次と八五郎は、黙って見ているより外に工夫もありません。

「八、帰ろうよ」

平次はいきなり言い出しました。

「金の茶釜は、親分？」

二人の兄妹を見送りながら、八五郎は不審の眉を顰ひそめます。

「鼠でも引いたんだらうよ、あんなものは二度と出て来ねえ方がいい」

「？」

ガラッ八は黙って平次の意志に引摺られるより外にはありません。

貧しい家と、美しい夕陽と、並んで帰って行く兄妹の後ろ姿を見ながら、変な心持で平次とガラッ八は街の方へ引揚げます。

四

それから暫くのあいだ、金の茶釜の話は、おくびにも出ませんでした。

「親分、変な事になりましたぜ」

ガラッ八がやって来たのは三日目です。

「何が変だ」

「金の茶釜の事ですよ」

「その話ならもう止してくれ、俺はもう聞きたくない」

平次は以てもつの外の手を振ります。

「増屋の佐五兵衛が、金の茶釜が出て来ないのに業ごうを煮やして、搜さがして持って来たものには、五十両やると言い出しましたよ」

「本当か、そいつは？」

平次は急に勢きおい立ちます。

「権八の浪太郎は帰されましたよ。あの晩は品川の茶屋で酔よっぱら払って、翌る日の

朝まで寝て居たんですって」

「そんな事だろうよ。ところで、八」

「へエ——」

「もういちど品川へ行つて見る気はないか」

平次は変な事を言い出します。

「今度は本気になって金の茶釜を捜して見よう。俺は五十両の金が欲しくなつたよ」

「へエ——」

何が何やら解らぬままに、八五郎は平次について行きました。

品川へ着いたのはもう午過ぎひるす、平次はいきなり町内の外科へ飛込み、無理に頼み込んで、見世物小屋まで医者といっしょに行きました。

「この二人の傷を念入りに診て貰いましょう」

番人の部屋へ踏込むと、まだウンウン言つて寝ている助七お大夫婦を指します。

外科医者は少し呆氣あつけに取られました。平次の勢いに押されて、嫌がる助七お大の容体を診ました。

「こいつはほんの引つ掻きだ。小刀でスーとやったんだろう、薬を塗つたり、晒木綿さらしもめんで巻いたりしているが、もうすっかり癒なおっている」

助七の肩先の傷を見て、外科医者はニヤニヤして居ります。

「此方は、先生？」

「お神さんの方は何ともないよ、足の筋なんか、駕籠屋より丈夫だ」

「それで結構、飛んだ手数でした」

平次は外科医を送り返してから、八五郎に眼配せして、いきなり助七夫婦の襟髪を取つて床から引出しました。

「太え野郎だッ。金の茶釜がなくなった申訳に、自分で引つ搔かきなんか拵こしらえやがつて、——浪人者に斬られたもないものだ。本当の事を申上げないと、二三百引つ叩ぼたいて、伝馬町へ送るぞ」

平次の劍幕はいつにない猛烈を極めます。

「申します、親分さん、申します」

「さア、言え。本当の事を言わないと」

ガラッ八も十手を閃ひらめかして二人の鼻先に詰め寄ります。

「本当の事は、何にも知らなかったのでございます。翌る朝、金の茶釜がないことに気が付いて女房と口を合せて、あんな細工をしました。寝て居て知らなかったでは済みません、浪人者に斬られた事にして、チヨイと肩先を引搔き、ウンウン言つて寝て居たのでございます」

「何という野郎だ、——サア八、これで風向きが変わつたろう。金の茶釜は、こ

の小屋になきや増屋だ、床下も天井も、皆な捜せ」

「へエ——」

平次と八五郎は、それから半刻ばかり、舞台の下の土まで掘って捜しましたが、そこには金の茶釜などを隠した様子もありません。

「来い。此処じゃない、八」

「へエ——」

二人は真直ぐまっすに増屋へ——。

「お、銭形の親分さん」

あまりの勢いに呑まれて、何が何やらわからぬ主人の佐五兵衛、その後から、
猶ずるそうな番頭の米吉よねきちも顔を出します。

「金の茶釜に五十両の褒美をかけたってえのは本当ですかい」
平次はいきなり問題の核心かくしんに飛込みました。

「え、本当ですとも。千両以上の値打のある金の茶釜ですもの、捜して下さい方がありや、五十両でも、百両でも出しますよ」

「百両でも？」

「私も増屋佐五兵衛だ、いかにも百両出しましょう。無疵むきずのまま、あの茶釜が手に入ったら」

「茶釜の目印は？ 捜し出した時、これじゃないと言われては困る」

平次はひどく用心深くなります。

「蘆屋あしや型の茶釜。底にタガネで、増屋と打ち込んであります」

「よし、それから」

平次は腕を組みました。

「親分」

心配そうにのぞくガラッ八。

「黙っている、——見世物小屋になきや、この家にあるに決って居るんだ。外から楽に投げ込めて、一寸人目につかないところと言うと——何処だ」

「さア」

「土蔵の中じゃないし、——店先じゃ誰の眼にもつく、裏の物置だろう、来い」
「へエ」

平次と八五郎について、佐五兵衛も米吉も裏へ出ました。

物置は二間に二間半、中はガラクタと炭俵だけで、何の変哲もなく、嘗^なめるように見ましたが、金の茶釜などはどこにもありません。

「親分」

八五郎はソロソロ心配になりました。

「心配するな、日本国中、どこへも行きようのない茶釜だ」

平次はお勝手から、土蔵の軒下から、凡そ人の目の届かないところを悉^{ことごと}く見

ました。が、金の茶釜はまだ出て来ません。

「親分、何うしたことでしよう」

佐五兵衛はそろそろ皮肉な調子になりました。

「旦那、——銭形の親分さんだ、見込んだ仕事に外れはずのあるわけはありません。百両の金を用意しましょうか」

米吉までがこんな事を言うのです。

「そうしてくれ」

と鷹揚おうようにうなづく佐五兵衛。

「八、解った」

平次はいきなり歓声をあげます。

「どこ、親分」

「あの井戸の中だ、覗いて見るがいい」

土蔵の側、潮が差して使えない古井戸に、腐りかけた蓋をしたのを平次は見付けたのです。

飛出した八五郎、蓋を払って覗くと、

「あつた、親分」

海近い井戸で深さはほんの五六尺、土蔵の軒下から外した梯子をおろすと、わけもなく中の物は取れます。

井戸の外でそれを受取った銭形の平次、しばらく諏訪法性の兜のように、濡れた金の茶釜を眺めておりましたが、やがて両手で捧げて貫々を引くと、

「御主人、——こいつが金の茶釜という代物に間違いないでしょうな」

「底には、タガネで打った増屋の刻印もある、——お気の毒だが、約束の百両

は貰つて行きますよ」

「へエ——」

「千両の金の茶釜が、潮の差す井戸にたった五日漬^{つか}つて、青い緑青^{ろくしょう}を吹いてるのは大笑いだ、こんなもので人寄せをやると、今度はお上じや抛^ほつて置かないぜ。——軽くて所払い、重くて遠島、獄門」

「——」

平次の言葉に、佐五兵衛も米吉も蒼くなります。

金の茶釜はそのまま、井戸の蓋の上へおき、平次は佐五兵衛の手から、百両の小判を受取りました。こんな事を大嫌いな平次が、一体それをどうするつもりでしょう。

五

「親分、その百両をどうするつもりで」

ガラッ八が一番先に心配しました。

「猫ババはきめないよ、心配するな」

平次の足は漁師町りょうしの方に向います。

やがて藤六の家の前に立った二人。

「御免よ、藤六はいるかい」

「あ、親分さん」

お春は飛んで出ました。つづいて藤六。

「金の茶釜は見付かったよ」

「へエ——」

「その褒美ほうびの百両、——こいつは俺が取る筋の金じゃねえ。金の茶釜を品川沖

で網に掛けた、お前の取る金だ」

「そ、それは嘘ですよ、親分。みんな増屋の細工で——」

「黙っている、増屋はあの金の茶釜を手に入れば文句はない筈だ。この百両はお前が取って構わない金だ、文句を言う奴があつたら、この平次が相手になる」

「——」

「そのうち三十両は増屋へ返せ、——相手が悪いから、証文を取上げるのを忘れるんじゃないぜ」

「親分」

「いいってことよ。あとの七十両で、せめて雨戸のある家へ引越してよ、親孝行でもするがいい。もう見世物なんかへ出るんじゃないぞ、ハッハッハッ、泣いてやがる、大の男が見つともないぜ」

「そう言う平次の眼も濡れていました。」

「それから、お春は増屋なんぞへ行くんじゃないぞ。その金のうちから裕あわせの一枚も買って嫁に行く仕度でもするがいい」

「親分、こんなに頂いちゃ済みません」

「いや、親孝行の見世物に出た褒美だ。心配するな」

「親分」

藤六とお春は、砂の上にへたへたと崩折くずおれて泣いておりました。

「お春はときどき神田の俺の家へ遊びに来るがいい、女房が話相手はなしくらいにはなるだろう」

「こんど来る迄に、畳と戸のある家へ引越してくれ。一度お前のおっ母アにも

見舞が言いたい」

「——」

「八、帰ろうか」

伏し拝む兄妹を後に、妙に鼻をつまらせているガラツ八を促^{うなが}して、平次は神田へ向います。

その日も秋の美しい夕暮でした。

×

×

「親分、絵解きをしておくんなさい。——釜はいつたい誰が増屋の井戸へ隠したんで」

ガラツ八は追いきりませんでした。

「藤六だよ」

「へエ——」

ガラッ八は少し予想外な様子です。

「増屋が藤六を金で縛って、親孝行の見世物なんて、あんな夕子の悪い芝居を打った、——釜は金被せの大贋物さ。きんぎ おおにせものそれを藤六の親孝行の徳で綱へかかった事にし、お上のお目こぼしをいいことに金儲けを企んだのさ」かねもう たくら

「そこ迄はあつしにも解るが」

「親孝行の見世物にされて、藤六はどんなにつらかった事か、あの男の口から聞いたろう。あれは本当の孝行者だけに、見世物にされるのがたまらなかつたのだよ。そうかと言って三十両の工面はつかず、妹も人身御供ひとみごかうに上げられず、

腹の中で泣いていたが、とうとう我慢が出来なくなつて、あの茶釜を隠したのだ。茶釜は偽物だという事をよく知っていたが、自分のところへ持って来るわけに行かない、見世物小屋に隠さなきゃ、増屋にあると言つたのはそのためだ。

正直者の藤六は、増屋のものは増屋へ返せば済むと思つたのだろう」

「成アーる」

「解ったか、八」

「解った、何も彼も解りましたよ」

「人の孝行まで金儲けの道具にした、あの増屋の野郎は憎い。が、藤六はいい男だな」

「あの娘はいいね、親分」

「何を」

そう言いながらも平次は独り者のガラツ八に、あんな嫁よめがあつたら——と考
えている様子でした。

(編注)

作品中には、身体の障害や人権にかかわる、差別的な語句や表現が見られますが、本書が成立した当時の時代背景等が現代とは異なる古典的な文学作品でもあり、著者が故人でもありますので、底本のままとしました。ご理解、ご諒承のほどをお願い申し上げます。

挿絵—萩 柚月

初出—「錢形平次捕物百話」第八卷 中央公論社 昭和十四年六月二十八日発行
行

底本—「錢形平次捕物全集」第五卷 河出書房 昭和三十一年七月十五月初版

編集・発行 銭形倶楽部

金の茶釜



錢形俱樂部

<http://www.zenigata.club/>